

90歳、笑顔と元気の物語

日本スマイリスト協会会長

近藤友二氏

火曜午餐会7月第2例会を19日、当部5階大会議室にて開催した。

近藤氏は東京に生まれ、家族とともに北海道に移住し炭鉱に就職。その後東京へ戻り、俳優榎本健一氏の内弟子とされた。俳優業を辞めた後は数々の仕事をこなし、そこで培った経験をもとに笑顔の大切さを世に広めるべく「日本スマイリスト協会」設立。日本の明るい未来のため「笑顔してますか」を合言葉に、全国で精力的に活動しておられます。

昭和7年～昭和40年

昭和7年に東京で生まれ13歳の時に東京大空襲を経験した。自宅が全焼し大変な苦勞をしたが自分でつらいと思ったことはない。食べ物無く、着物と交換してなんとか生きていたが父は食べ物を求めて北海道へ移住を決めた。終戦直後、父は勇気がいったはず。親には生かしてもらったという感謝の思いがある。

18歳の時、炭鉱の仕事をしながらも東京へ帰りたい思いがつのる。お金が無いのでなんとか楽しみながら頑張った。夜間高校2年の時に東京へ帰り、当時人気俳優の榎本健一氏が主宰する演劇研究所1期生となり内弟子としてトイレ掃除から始めて芝居に精進。12年間喜劇を学ぶ。榎本健一は「普通の芝居ができてこそ喜劇が演じ

られるのだ」と厳しく指導。俳優業を続けていたが、昭和40年33歳の時、突然の妻の疾病により俳優廃業。その後は数々の会社で仕事に就いたが、就職した会社4社すべてが倒産するという目にあった。そんな中、笑いの本場大阪で仕事をしていて、働いている人たちに笑顔がないことに気づいた。落語、漫才の笑いはあるが、たくさん庶民の顔を見てこれではいけないと強く思うようになった。

昭和60年～現在

昭和60年53歳の時に笑顔教室開講。最初はだれも共鳴してくれなかったが、一生懸命やっているうちに講演依頼が増えていった。全国45都道府県、「笑顔しましょう」と笑いの力を広めていった。平成13年69歳の時、妻の介護が始

まり以来5年間、24時間介護で「介護の心」を悟る。介護する側、される側、どちらが幸せか。介護することを喜ばなければならぬ。感謝の心を伝えるために元気よく大声を出すと妻から「ありがとう」の言葉が増えた。平成29年85歳の時にはホノルルマラソン完走。ホノルルマラソンはタイムよりも完走することが何より大切。

平成30年に前立腺がんを患うも4か月半で完治。近藤流治療はとにかく明るく物事を見ること。「元気です」、「神様なおしてくれてありがとう」と毎日、大きな声で言い続ける。感謝を伝えることが大事である。

令和4年5月90歳で通信制「笑顔教室」開講。

べっぴんさんおはよう、
ハンサムおはよう

笑顔の本質は心。家族、社員、お客様、奈良県、愛する思いが笑顔になる。洗面所の鏡で笑顔の練習をしよう。楽しむことが大切。自分で自分を褒めることが大事。女性は「べっぴんさん」男性は「ハンサム」をつけて挨拶しよう。照れくさいけど大丈夫。表情が和らぐと自分の心が柔らかくなる。人生は理論だけではだめ。感性が重要。笑顔は相手の笑顔も褒めよう。笑顔は笑顔で返る。空気が活性化する。

まず笑顔

「笑顔する」とプラスの意識になる。まず笑顔。後ではだめ。自分自身で積極的に思うことが大事。能動の笑顔とは人に善意を伝える笑顔。誰にでもできること。笑顔こそが明日を作る。

